56 軍医寮発足のさいにみられた東校と兵部省の確執

深瀬泰旦

明治初年兵部省に軍医寮が設立された折に、医官要員の補充をめぐって東校と兵部省の間に、ぎくしゃくした関係が存在したことはおおくの史書の教えるところである。しかしそれも短期間のうちにその関係が修復されて、軍医寮がつつがなく発足することができたように記述されているものがおおい。

その一例をあげれば、鈴木要吾の『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』（昭和八年）には、佐藤尚中、松本良順の弟子にあたる岩佐純が、両者の仲をとりもって事がおさまり、「林紀、石川良信を次官とし、緒方惟準、石黒忠悳を一等軍医正とし、田代基徳、足立寛、永松東海、土岐頼徳、橋本綱常、名倉知文、三浦煥、横井信之、小佐内健等の大学派の人達を局長といふことにして、今の半蔵門外、田原藩三宅家の跡に軍医寮と病院を置く事になった」とある。

これら諸書が準拠したのは、松本良順の『松本順自伝』（明治三五年）であろう。初代軍医頭に就任した、まさに当事者である松本良順の自著ということで、ためらうことなく無批判に引用したものと思われる。

本口演は、両者の確執が軍医寮発足前からはじまり、設置後も数年にわたってその状態は継続し、明治一〇年軍医学校の廃校のころにいたって、ようやく終焉をみるにいたった経過をあきらかにするものである。

明治二年七月八日官制の改正によって軍務官が廃止され、あらたに兵部省がおかれた。大村益次郎の国民皆兵の構想にもとづいて、明治三年一一月一三日徴兵規則が発布され、兵部省としてはじめて選兵という新しい事業にふみだすことになった。兵部省はこれに対応する部局として軍医寮を設置してほしい旨を、太政官に上申している（明治三年七月）が、軍事病院という組織の中に軍医寮の職掌を包含させればよいではないか、というのが太政官の考え方であった。

国軍の喫緊事である選兵にとって、欠くことのできない軍医寮設置は時の流れであった。しかし兵部省が軍医寮設置をいそぐあまり、その要員を東校の教員をもって補充しようと、誰かれとなく名指しで転属を要請したことによって、東校側は態度を硬化させていたのである。

欧米の視察から帰国した山県有朋が兵部省の中枢にすわってからは、軍医寮設置の流れはさらにおおきくなった。軍医寮設立にあたってスタッフをあつめるためには、その長に強力な人物をすえなければならないと山県は考えて、松本良順に白羽の矢をたてた。しかし軍医頭就任ふくみで兵部省に出仕した松本は、東校を名指しで非難した「松本良順建議」（明治四年五月五日）を発表したことによって、両者の関係はさらに悪化した。

このとき両者の間にたって和解の斡旋の労をとったのが、さきにのべたように岩佐純であり、これによって一応の条約が成立したが、軍医頭松本良順は軍医寮発足にあたっては、そのスタッフとして東校以外から人材をもとめざるをえない状況であった。

落合泰蔵の手記にある発足当初の軍医寮の医官たちは、東校とまったく関係がない、各藩医から転属した人物ばかりである。

そしてさきの鈴木要吾の著書に氏名のあがっていた人びとが東校から陸軍へ転属になったのは、明治七年ごろ両者の関係に雪どけがみえはじめてから後であることを、個々の医官の経歴から明らかにしえた。

（順天堂大学医学部医史学研究室）